国会の「結界」

野崎 哲

小学校か中学校の社会科見学で行っていなければ、実際に「国会」を見た経験のある人は少ないのではないか。以前は見学するのに国会議員の紹介が必要だったが、いまは一般の参観も可能になっているので、機会があれば見学されることをおすすめしたい。大理石を多用した荘厳な建物と手の込んだ建具、レトロな什器類や仰々しい赤絨毯に圧倒されるのではないだろうか。案内の衛視（国会の警務官）が、国会議事堂の建設には約一七年間もかかって当時は日本最大の建造物だったとか、中央玄関は普段は使わないとか、中央広間の周りは琉球石で作られていて化石の跡があるとか、国会の備え付けの時計は有線で同期していて止めることができるとか、もろもろのエピソードも紹介してくれるはずだ。

国会議事堂の威圧的な雰囲気や、「先例」とか「慣例」と言われる国会の独特のルールは「国会」という独特の世界を形作る舞台装置として機能してきた。国会の慣習には、一般の感覚からは理解しづらいものも多いが、私は一定の合理性があったのだと思っている。ソトヅラで権威付けするのとあわせて、国会議員や関係者を威圧し「国権の最高機関」を構成している自覚と責任感を感じさせる。世俗の雰囲気と隔離して、「こんな立派なところで議論するんだから、相応しい発言をしなさい」という無言の圧力となってきたのではないか。国会の独特の重厚な世界や作風は、日本の戦後議会制民主主義の一種の「結界」のようなものだったと思うのだ。

しかし、いまやその「結界」が破られつつある。その原因の一つは国会議員の入れ替わりが激しくなったことだ。とくにこの一〇年間ほどは、選挙結果の揺れ幅が非常に大きくなっている。〇五年の郵政選挙では「小泉チルドレン」八三人が初当選したが、〇九年選挙で議席を守ったのは一〇名のみ。〇九年の政権交代選挙では民主党に「小沢チルドレン」を中心に一四三人の新人議員が誕生したが一二年の選挙で生き残ったのは一一人に過ぎない。一二年の総選挙では自民党から一一九人が初当選している。小選挙区制度の定着を背景に選挙ごとに一〇〇人近い議員が入れ替わり、わずかな期間に二〇〇人もの議員が使い捨てられた。このような中で、国会の伝統

や運営ルールの継承が難しくなってきた面があるのではないか。

さらに候補者の公認権や資金の配分の権限を政党の執行部が握り、よしあしは別にして五五年体制下で新人議員を教育し切磋琢磨させてきた「派閥」の機能が弱体化、各党内の批判勢力が消えてしまった。国会議員の発言がノー・コントロールになって、政党内での自浄機能も働かない。むしろ既成のルールに挑戦するかのような、「ぶっちゃけ」や「ホンネ」の話の方が受けてしまう傾向が強まっているように思える。

日本維新の会の橋下徹共同代表は昨年五月に、兵士たちの「休息」のために「慰安婦制度は必要なのは誰だってわかる」と話して話題になった。酒場の与太話なら聞き流してもいいが、野党第二党の代表が堂々と言っちゃまずい。橋下は、在沖米軍司令官に対して、米兵の「性的なエネルギーをきちんとコントロール」するため「もっと風俗業を活用してほしい」と訴えて激怒させてもいる。

麻生太郎副総理は、昨年七月の民間シンクタンク（国家基本問題研究所）の研究会で、「ナチス政権下のドイツでは、憲法は、ある日気づいたら、ワイマール憲法が変わってナチス憲法に変わっていたんですよ。誰も気づかないで変わった。あの手口、学んだらどうかね」と発言して国際的な批判を浴びた。

安倍晋三総理は昨年四月の参院予算委員会で、「村山談話」に関連して、「侵略という定義は学界的にも国際的にも定まっていない。国と国の関係でどちらから見るかで違う」と答弁して話題になった。これは「侵略の定義に関する決議」（国連総会決議3314/1974）があるので単純に誤りである。

二〇一一年三月の福島第一原発事故の直後から開かれた各党・政府震災対策合同実務者会合で、当時「たちあがれ日本」を代表して出席していた藤井孝男議員が、「全国で放射能が検出されているというが福島原発のものかは分からない。混乱に乗じて第三国人がバラまいている可能性がある。治安の強化が必要」と発言するのを聞いて私は仰天した。予算委員長などを歴任したベテランで、かつて橋本派が推す自民党総裁候補にもなった人がこんな認識で、それを公に口にするのを聞けば、まったく暗澹たる気持ちになる。

もちろん、以前から失言する議員、不見識な議員は大勢いた。しかしそれが度を超して表面化すれば責任を問われたし処分を受けたはずだ。一九九三年にパーティーで「半世紀前に出来た憲法に後生大事にしがみつくのはまずい」と発言した中西啓介防衛庁長官（細川内閣／一九九三年）は辞任に追い込まれた。新聞のインタビュー

で「南京大虐殺はでっち上げだと思う」と語った永野茂門法務大臣（羽田内閣／一九九四年）や閣議後記者会見で「日本は侵略戦争をしようと思って戦ったのではない」と言った桜井新環境庁長官（村山内閣／一九九四年）、「植民地時代に日本は悪いこともしたが良いこともした」と発言した江藤隆美総務庁長官（村山内閣／一九九五年）らはいずれも辞任に追い込まれている。

安倍晋三は昨年の参議院選挙前の党首討論会で植民地支配や侵略について、記者から「中曽根さんや小泉さんも植民地支配や侵略について判断してきたのに、安倍さんが判断を示さないのはなぜか」とたずねられて、「中曽根総理はそういう判断を……されてませんよ」と否定したがこれも単純な誤りだ。タカ派のイメージが強い中曽根康弘だが、米英に対しては普通の戦争だったが「中国に対しては侵略戦争だった」と、明確に語っているのだ。小泉純一郎や岸信介ですら侵略戦争だったと明言している。本気で反省していたとは思えないが、微妙な課題には批判を浴びないようにむしろ丁寧に答弁をしてきたのである。

私の印象では、政治のタガが本格的に外れたのは小泉純一郎総理の頃だったように思う。とくに、イラク復興支援法による自衛隊の派遣についての党首討論での小泉総理の答弁が記憶に残る。党首討論で「非戦闘地域に限る」とされている派遣地について質問されて、「イラク国内の地名とか、よく把握しているわけではない。どこが非戦闘地域で、どこが戦闘地域か、いま私に聞かれても、分かるわけない」と答弁した。これはすごい。自衛隊を紛争地に送ろうという総理大臣が、派遣先について「分かるわけがない」と開き直っている。もちろん総理大臣が森羅万象を知るわけではないし、小泉さんが個人として分からないのはしかたがない。でも、国会で総理として答弁しているのは職責として答えを求められているのであって、個人として「知るわけがない」というのは全く答えになっていないのだ。これが問題にならず、むしろ小泉さんらしいと容認されてしまった。これが許されたら国会審議自体が成り立たなくなってしまう。

かさねて言えば国会の先例や慣例も相当に揺らいでいる。国会の仕組みは法律的にはほとんどが単純多数決が原則だが、運用の全体は様々な規則や先例などで縛られている。例えば、国会法の改正や議運の議事に関する決定は全会一致で行なうのが慣例だし、参議院の委員長ポストの配分は各会派の議席数に比例して配分するのが慣例。国会法はルールの問題なので多数派が勝手に変えては困るし、

議員の運営に少数派の意思を入れるために議事運営やポストを少数派にも配分してきたのである。ところが二〇〇〇年には憲法調査会を設置するために国会法改正が多数決で強行され、いまや議事運営を多数決で押し切る「強行採決」が常態化している。

最近では昨年末の特定秘密保護法の審議に際して、水岡俊一参院内閣委員長と大久保勉参院経済産業委員長の解任を多数決で強行したうえ、後任を多数派から選ぶという前代未聞の慣例破りも行なわれた。これが許されれば多数派がすべてのポストを独占できることになりかねない（第一八六国会で復帰）。秘密保護法の参院採決の前提である公聴会（一二月四日一五時）の開催は、前日一八時からの理事会で多数決で決まったが、常識的に言ってこんなタイミングで意見陳述者を探すことは困難だ。こうした乱暴な運営が常態となっているのが現実である。

かつて、土井たか子さんという国会議員がいらした。社民党という小政党の党首だったが、国会議員として三〇年以上の経歴をもち、衆議院議長まで務めた大物議員だ。彼女に質問の日程が入ると、数日前から緊張してピリピリしていたのを思い出す。私も若かったので、「議長までされた大ベテランで国会を知り尽くしているんだから、もっと気楽にやればいいじゃないか」と言ってしまったことがあるが、「国会は国権の最高機関でそれを構成する国会議員は大きな責任がある。委員会や本会議での発言は議事録に載って半永久的に残る。質問の出来によって政策が変わることだってありうる。有権者への責任も大きい。多少長くやっているからといって慣れっこになって、いい加減にやっていいなんてことはない」としかられてしまった。「オバさん真面目だなー」と思ったが、「国会」というものをものすごく大切に考えていたことは間違いない。彼女に限らず、戦争を経験して戦後の議会制民主主義を獲得した世代の政治家は、立場の違いを超えて、「国会」への敬意や重要性の認識を共有していたように思えるが、いまや隔世の感がある。

私は、ほぼ四半世紀にわたって国会周辺で活動してきたが、正直いって国会議事堂の重々しい雰囲気は好きではないし、市民感覚から乖離した国会の仕組みにも疑問がないわけではない。いつかは、国会の「結界」を市民と共に破りたいという野心もある。しかし、いまやポピュリズムに乗って押し寄せる右からの攻撃を前にしてたじろいでいるのが実際。ここをなんとかしのいで、国会の「結界」の決壊を防ぎたいというのがいまやホンネである。